

Israel Unveiled Vol 1: Southern Steps 南壁の階段

英語版オリジナル 2017年5月12日公開 : <https://youtu.be/f4QZjQcwClc>
メッセージ by Amir Tsarfati /Behold Israel : <http://beholdisrael.org>

日本語訳 by ガスタフソンあつみ / 校正 By 武田照子: <https://youtu.be/9gB6fYZClTQ>
字幕 by 木下言波 Divine US : <http://divineus.org/>
YouTube チャンネル <https://www.youtube.com/user/TheDivineUs>

シャローム! エルサレムは神殿の丘からご挨拶します。私のすぐ後ろにあるのは、480年前のオスマン帝国時代に封鎖された三重門です。これは元々、ヘロデ大王によって造られた南の擁壁です。ヘロデ大王の時代、神殿の丘には4つの主要な擁壁がありました。これは、巨大な土台を建設して、その上にユダヤ人の神殿が壮大で美しい市場と並ぶようにしたヘロデ大王のやり方でした。というのも、結局のところ、神のビジネスほど偉大なビジネスは無いからです。

南壁は、エルサレム市街の南部に面していました。当時は、そこが最も人口の多い地域だったからです。またそれは、エルサレムの歴史的起源でもありました。ダビデが、エブス人から攻め取ってダビデの町としたのです。ここは、ダビデがその宮廷を建てさせた場所で、ダビデとバテ・シェバにまつわる一連の出来事が起こった所です。こちらは、ソロモンがイスラエルの王となった場所です。ですから、一般ユダヤ人巡礼者たちにとって、南壁が神殿の丘への表玄関となったのは必然的かつ当然のことでした。一般ユダヤ人巡礼者たちには、神殿の丘への出入り口として、主な組み合わせが2つありました。私の背後にある三重門は、主な入り口でした。ここは、ギホンの泉の水に加え、ヒソプと赤い雌牛の灰の入った儀式用の浴場で、ユダヤ人巡礼者が自らを清めた場所です。その後、巡礼者は白い衣で身を包み、清くない物に一切触れないように非常に気を遣いながら、いけにえの動物を手携えて、神殿に上って行きました。階段を上ると、巡礼者は、入り口に立っている祭司に神殿税を支払いました。そして、これらの門をくぐって、神の庭へと上って行きました。

私の後ろの門は、ユダヤ人の伝承では、フルダ門として知られています。フルダは、女預言者でした。列王記第二22章と歴代誌第二34章に、簡潔に言及されています。聖書には、ヨシヤ王の時代に律法の書が発見されると、ヒルキヤは、アヒカム、アクボル、シャファン、アサヤと共に、主のみこころを求めするためにフルダの元に行った、と書かれています。もし入り口が、巡礼者が身を清く保ちつつ、神殿の祭司の元にいけにえの動物を持って行き、義務を果たしたくて敬虔な思いで近づく場所だとすれば、出口は、全く別の話になります。身内が死んで喪に服している人以外は、決して出口から入ることは、許されなかったと言われていました。出口から入るという行為そのものによって、その人は、皆から死者に対する慰めや弔辞を受けたのでした。

神殿を出るとすぐに、南壁の階段として知られていた階段の大部分があります。これらの踏み段は、ご覧の通り、モリヤ山の岩盤から切り出されたものです。それぞれの段の縦幅は均一ではなく、短いのと長いのと、短いのと長いのと、誰も走って上り下りすることが出来ないようになっていて、敬虔な雰囲気を作り出していました。出口のすぐ下にあるこの階段は、ユダヤ教のタルムードでは「教えの

階段」、あるいは「教師の階段」として知られていました。ヘブル語では「マアロット ハミドラシャ」と言います。かつては、非常に物凄く影響力のあるラビたちが、そこで教えていました。彼らの門下生たち全員は、とてつもない称賛の思いを持って彼らを取り囲んで立っていたので、彼らは階段に腰掛けて教えていた事が、分かっています。その当時は、ラビたち、主に、ユダヤの宗教議会であるサンヘドリンの議長や長老たちは、誰からも非常に尊敬されていました。人々は彼らの外見、歩き方、話し方、教え方を真似るのでした。サンヘドリンの偉大な指導者の一人であった長老ガマリエルも、ここで教えていたことが分かっています。彼の弟子、あるいは門下生の中には、他でもない、使徒パウロとして知られるタルソのサウロがいました。パウロは、ユダヤの伝統に関する知識と理解、そして旧約聖書の知識の多くを、この階段の上で、ラビ・ガマリエルから吸収しました。私たちは、イエスご自身がここで教えられたことも分かっています。ここで教えられたというだけでなく、オリブ山のふもととの斜面にあった、このすぐ近くにある墓地の事を言及されたことも分かっています。イエスは、あの墓地の低い部分を指して、次のように言われたと記されています。

「忌わしいものだ。偽善の律法学者、パリサイ人たち。あなたがたは白く塗った墓のようなものです。墓はその外側は美しく見えても、内側は、死人の骨や、あらゆる汚れたものがいっぱいのように、(マタイの福音書23:27)」
マタイの福音書23章27節です。

しかし、今日ここで私がお伝えしたいお話は、五旬節のお話です。五旬節の祭りでは、過越しの祭りから50日目にユダヤ人が集まります。その日に集まることの意味を理解している人はあまり多くありませんが、「過越し」、「五旬節」、「仮庵」の三大祭りを祝うために、世界の隅々からエルサレムに来ることになっていたユダヤ人たちが、その日も皆、ちょうどこの辺りに集まっていたことは知られています。それらの祭りの日に集まってくる何千人もの人たちが、水による清めの儀式を受けることができるのは、ここだけだったからです。彼らは、色々な国から来ていたので、色々な言語に堪能でした。あの驚くべき五旬節の出来事を伝えている部分を、使徒の働き第2章からお読みします。

「五旬節の日になって、みなが一つ所に集まっていた。すると突然、天から、激しい風が吹いてくるような響きが起こり、彼らのいた家全体に響き渡った。また、炎のような分かれた舌が現われて、ひとりひとりの上にとどまった。すると、みなが聖霊に満たされ、御霊が話させてくださるとおりに、他国のことばで話した。さて、エルサレムには、敬虔なユダヤ人たちが、天下のあらゆる国から来て住んでいたが、この物音が起こると、大ぜいの人々が集まって来た。彼らは、それぞれ自分の国のことばで弟子たちが話すのを聞いて、驚きあきれてしまった。彼らは驚き怪しんで言った。『どうでしょう。いま話しているこの人たちは、みなガリラヤの人ではありませんか。それなのに、私たちめいめいの国の国語で話すのを聞くと、いったいどうしたことでしょう。私たちは、パルテヤ人、メジャ人、エラム人、またメソポタミヤ、ユダヤ、カパドキヤ、ポントとアジア、フルギヤとパンフリヤ、エジプトとクレネに近いビヤ地方などに住む者たち、また滞在中のローマ人たちで、ユダヤ人もいれば改宗者もいる。またクレテ人とアラビヤ人なのに、あの人たちが、私たちのいろいろな国ことばで神の大きなみわざを語るのを聞こうとは。』人々はみな、驚き惑って、互いに『いったいこれはどうしたことか。』と言った。しかし、ほかに『彼らは甘いぶどう酒に酔っているのだ。』と言ってあざける者たちもいた。そこで、ペテロは十一人とともに立って、声を張り上げ、人々にはっきりとこう言った。『ユダヤの人々、ならびにエルサレムに住むすべての人々。あなたがたに知っていただきたいことがあります。どうか、私のことば

に耳を貸してください。今は朝の九時ですから、あなたがたの思っているようにこの人たちは酔っているのではありません。これは、預言者ヨエルによって語られた事です。「神は言われる。終わりの日に、わたしの霊をすべての人に注ぐ。すると、あなたがたの息子や娘は預言し、青年は幻を見、老人は夢を見る。その日、わたしのしもべにも、はしためにも、わたしの霊を注ぐ。すると、彼らは預言する。(使徒の働き2:1-18)」

ペテロはその時、大胆に語りました。彼の語ったことは、基本的に、イエスがメシアであり主であることを、旧約聖書全体を通して、ここにいた人たちに明らかにするものでした。ペテロは大胆で、活力に満ちていました。私たちが知っている、あのヨハネの福音書第21章のペテロとは、全く対照的でした。驚きですね。

聖書は、その時の五旬節に起きた出来事と、ユダヤ人がシナイ山で律法を与えられた時、シナイ山のふもとで祝った最初の五旬節に起きた出来事の間、際立った差異を私たちに語っています。出エジプト記32章28節には、次のことが書かれています。モーセがシナイ山から降りてくると、イスラエルの民は金の子牛を伏し拝んでいました。神は彼らを罰して打たれたので、その日、3,000人が滅びました。(出エジプト記32:28)そのことは、あの日、ちょうどこの場所で聖霊が下られた時、シナイ山で律法が与えられたように、それが炎のような分かれた舌となって降りて来られて、その日のうちに3,000人の人がここで救われたことと、非常に対照的で、美しく驚くべきものがあります。対照的であるだけでなく、シナイ山のふもとでは影であったものが、ここでは実体となって、見事に実現されているのではないのでしょうか。ローマ人への手紙5章20節には、こう書かれています。

「律法がはいつて来たのは、違反が増し加わるためです。しかし、罪の増し加わるところには、恵みも満ちあふれました。(ローマ人への手紙5:20)」

神の恵みは、どんな問題や必要に対しても、十二分にあります。コリント人への手紙第二12章9節に、次のように書かれています。

「しかし、主は、『わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。』と言われたのです。(コリント人への手紙第二12:9)」

ヨハネの福音書第21章から使徒の働き第2章へと、ここに描かれているペテロの変貌ぶり(トランスフォーメーション)には、目を見張るばかりです。もはや、キリストの死を悼んで悲しんでいるペテロではありません。復活の力で満たされた、大胆なペテロです。使徒の働き第2章は、全て復活に関するものです。それは全て、復活の力のことであり、聖霊の働きのことです。皆さんはいかがでしょう。あなたはイエスの復活の力をご存知ですか。あなたの人生において、イエスは、どんな存在ですか。あなたにとって、イエスは、まだ赤ちゃんでしょうか。だから、何かを頼む時には、まだ母親のマリアを通して頼まなければいけないと思っていますか。もしくは、十字架にかかったままのイエスで、あなたには頼りなく感じられ、助けてもらえないかと思えるような存在ですか。それとも、あなたはイエスの復活の力を本当に知っていますか。キリスト教を全く別格のものにするのは、復活の力です。モハメッドも死に、ブッダも死にました。そういった人たちは皆死んでしまいました。それらの宗教は全て、死んでしまった指導者たちに土台を置いています。イエスは、よみがえられました。イエスは、生きておられます。それが、ちょうどこの場所で起こった最初の五旬節を、特別なものとするのです。イエスは死者

の中から復活されました。死は、勝利に呑まれました。死は、そのとげを失いました。そのとげは、力を失ってしまったのです。あなたは、イエスの復活の力を知っていますか。